



新しい学習指導要領の二年生「書くこと」の言語活動例に「社会生活に必要な手紙を書くこと」が明示されました。国際化や情報化の進展の中で、これからますます相手意識や目的意識を重視したコミュニケーションが求められていることを反映しています。

# 手紙を書くこと

本特集では、さまざま実践事例を通して、「手紙」のもつ学習素材としての魅力、言語活動そのものとしての多様な可能性を探ります。

現代は、離れた相手との文字によるコミュニケーションは、電子メールが主要な手段となっています。しかし、大切な心を込めてゆっくり肉筆で書く「スロー・ライティング」のよさも見直してもらえればと思います。

## 手紙の教育力をめぐる三つの事例

信州大学教育学部教授 藤森裕治ふじもりゆうじ

提言に代えて、「手紙」をめぐって私が関わった事例を三つ紹介する。本誌の八ページから紹介している三つの実践提案と併せ、このメディアがもつ豊かな教育力を感じていただければ幸いです。



### 電話か・手紙か

中高生の大半が携帯電話を所持する時代が来ることなど夢想だにしなかった一九九〇年代初頭のことである。私は、国語教師として初めて勤務した高等学校で、こんな論題の教室ディベートを盛んに行っていた。

直接会えない相手に謝るには、電話と手紙どちらがよいか

AかBかを排他的に選ばせる右の論題は、命題の是非を検討すべきディベートに採用してはならない。当時はそんなことも知らずに、生徒が議論に熱中するのをまぶしく

観察していたものだった。

その中で、忘れられない思い出がある。あの日、最初に立論を始めたのは電話派だった。彼らは手紙が通信手段としていかに不便で面倒くさくて時間がかかるものであるかを力説していた。手紙は、相手と直接やりとりができないために、謝るという行為が自己満足に終わってしまうということも付け加えた。高校生としてはなかなか隙のない立論だった。

こうした批判を受けた手紙派は、多くの場合、電話の弱点を指摘して対抗する。電話は一過性で保存がきかず、互いの声を交わすうちに感情的になってしまい、言った言わないの険悪な状況を招きかねない……というのがよくある展開である。その日もきつとそういう議論になるだろうと、私はたかをくくっていた。

ところが、あの日の手紙派は、意外な立論を始めた。電話派に対抗するどころか、彼らの批判をすべて認めたのである。電話派が言うように、手紙は書くのが面倒くさ

い。謝る言葉を選びあぐねて時間がたち、せっかくだ書いても読み直してみると、気に入らなくて破り捨てることもままある。郵便ポストに投函しなければ届かないし、届いたとて読んでもらえるか定かではない。自己満足と言われればその通りである、と。この立論を聞いてあつけにとられたのは、もちろん電話派である。けれどもうそういう反応を導くことこそ、手紙派のねらいだった。彼らはこう続けた。

これほどデメリットの多い手紙を、あえて使って謝ることの意味は何でしょうか。それは誠意を表すことです。手問ひまかかると、相手に読んでもらえるかどうかはわからない。そんな手紙は誠意の結果なのです。人に謝るための通信手段を選ぶとき、僕らが最も大事にすべきなのは、便利さや安さではなく、どれだけ心を込められるかです。

「自暴自棄」という四字熟語を思い浮かべていた聴衆は、この議論を聞いて「どんでん返し」という慣用語が上書きされたようだった。

## 字のないはがき

向田邦子「字のないはがき」は、中学二年の国語教科書にある味わい深いエッセイである。接続詞をほとんど使わない簡潔きわまる文体で読者の心をゆさぶる。「父」の手紙は「一点一画もおろそかにしない大ぶりの筆で」書きさされ、娘あてに「殿」を使う。手紙の本文は「折り目正しい時候のあいさつに始まり」、娘を「貴女」とよんでこまごまとしたことが記されている。「大酒を飲み、かんしゃくを起こして母や子供たちに手を上げる父の姿はどこにもなく、威厳と愛情にあふれた非の打ちどころのない父親がそこにあった」と述べられている。

大学のゼミで、この作品と米倉育加年「大人になれなかつた弟たちに……」とを引き比べ、「泣ける対決」と称して教材分析演習を行った。どちらの作品がより涙を誘うかという、いくぶん不謹慎な演習である。

に心ひかれ、どのような句を詠んでいるかに的を絞って読み進める。

この分担当学習が進んだところで、「芭蕉はどのような思いで旅を続けていたのか」という問いが立てられ、グループで話し合っただけの理解を深めることになった。あるグループでは、有名な「夏草や……」の句が詠まれた直前で芭蕉が「涙を落とすはべりぬ」とあるが、これはどんな気持ちだったのだろうかという話題が話し合われた。「自然」の窓を担当していたAさんは「自然は変わらないのに人間はどんどん移り変わっていく、そのはかなさが哀しかったのでは」と言う。これに対して「古人」の窓を担当していたBくんからは「僕は、義経とか昔の人の心と一体になれた気がしてうれしかったんじゃないかと思う」という意見が出された。

グループで結論を絞ることは強制されず、学習活動のシメは「これまでに読み取ったことを踏まえて、芭蕉さんに手紙を書こう」というものだった。こんな文章が記されている。

お元気ですか。江戸を出発して、平泉まで来た今、何を感じていますか。

「字のないはがき」派からは、「泣けるツボ」として、やせ細って疎開から帰ってきた妹を抱いて男泣きする「父」の描写が紹介された。我が子に対する愛憐の情が堰を切り、「大人の男が声を立てて泣くのを」娘に目撃されてもかまわず慟哭する「父」わずか四文に託された「父」の表現に、ゼミ生一同、胸を打たれたそのときである。発表班の担当から意外な解説を聞かされた。

通常、ここに表象された父の心情は、娘に対する限りない愛情、優しさと解されます。それだけでしょうか。この作品の前半部分にあった、手紙の文面と日常生活の言動とで激しく異なる、父の印象の差に注目してください。私たちは、家族への不器用な愛情だけではなく、激しくなる戦時下、たった一人で一家を守らねばならなかった父親自身の弱さ、自らのふがいなさに泣く姿を読み取ります。

父は「私」にも疎開した妹にも大量の手紙と葉書を渡している。離れて暮らす子どもたちのことが心配でならなかったのだ。大量の手紙と葉書は、家族の生活と安全がすべて「父」にかかっているという重圧を

……最初は旅が好きで、人生のまとめとして出たけれど、今まで旅をしてきて、古人や自然、歴史をたくさん感じましたよね。古人を尊敬しているからこそ、旅に出て自然を感じてるのではないかなど私は考えました。……時の流れを考えると悲しくなるけれど、古人と自分とが重なると思えるとうれしいでしょう。それがすべて芭蕉さんが目指す旅なんですよ。芭蕉さんの人生は、古人を感じられる人生がいい、だから古人を追う旅にしたんですね。残り少ない人生と思わず、元気にがんばってください。

暗喩する。この暗喩が父のむせび泣きにつながるという解釈だ。「日頃気恥ずかしくて演じられない父親を、手紙の中でやってみたのかもしれない」と「私」は推測するが、強そうに見えて実は弱い「父」のほんとうの姿が、手紙と葉書に映し出されているのである。

## 旅人芭蕉さん

信州大学教育学部附属長野中学校では、平成二十三年度の公開研究会として「旅人芭蕉さん」と題した授業を行っている。松尾芭蕉「おくのほそ道」から、「門出」「白河」「壺の碑」「松島」「平泉」を取り上げ、芭蕉の人物像について考えてみようという大がかりな単元である。

学習活動はグループ学習を中核にして進めた。四人で一つのグループを作り、それぞれに「古人」「自然」「旅」「窓」と称して作品を割り振り、これを「窓」と称して作品を捉える切り口とした。例えば「古人」を担当した生徒は、芭蕉が作品中でどのような古人に言及し、どのような思いを寄せているかに注目して通読する。「自然」を担当した生徒は、同じくどのような情景

手紙を書くという活動によって、「芭蕉の思い」を理解するという活動が、「芭蕉への思い」を表現する活動に変容している。

以上の事例において、手紙は実にさまざまな教育力を発揮している。「電話か・手紙か」では、メディアの特性を考える素材として、「字のないはがき」では、人物の心情を解釈するキーワードとして、そして「旅人芭蕉さん」では、実践提案2(P.10)と同様、古典を身近に感じる活動としてそれぞれ機能しているのである。

手紙には底知れぬ教育力がある。このことを再認識していただければ幸いです。

## 藤森裕治

長野県生まれ。東京都立高等学校教諭を経て、現職。教育学博士。専門は国語科教育学（授業研究、日本民俗学、NHKラジオ高校講座講師）。著書に『死と豊穡の民俗文化』（吉川弘文館）、『国語科授業研究の深層 予測不可能事象と授業システム』（東洋館出版社）など。

